

脳研究所の果たすべき 役割と機能

新潟大学脳研究所長 那波宏之



新潟大学脳研究所のルーツは昭和31年に中田瑞穂先生らのご尽力により設立された「新潟大学脳研究室」にあるようです。その後、植木孝明先生のお声かけによる医学部の教官定員の援助などを受けて、昭和42年(1967年)にはわが国で最初の脳に関する国立大学附置研究所として開設されました。開設以来一貫して、「基礎と臨床の一体化を志す」という研究理念に基づき、当初から臨床2科(脳神経外科・神経内科)をコアとして、神経変性疾患を中心とする脳疾患の原因、病理、診断学、治療法を研究してきたという実績をもっております。その意味で当脳研究所は、基礎医学研究分野から大学病院の臨床部門までを有するシームレスな研究体制を実践するユニークな研究所であります。

平成22年に脳研究所は「脳神経病理標本資源活用の先端的共同研究拠点」の全国共同利用研究施設となり、全国のべ300機関と脳疾患病理・疾患モデル動物・遺伝子解析にかかる共同研究を展開しました。平成27年にはその成果により、拠点としての認定更新が承認され、平成28年春からは「脳神経病理資源活用の疾患病態共同研究拠点」として本邦ならびに海外にむけて脳疾患の共同研究の世界展開を企てることになりました。現在、脳研究所は中国、ロシア、北欧、北米の関連機関との国際共同研究、研究協力協定、国際交流協定を皮切りに、世界的な認知度向上にも努めております。

最近では教授の退職等もあり若手の教授が3名生まれ、脳研究所の世代交代が進んでおります。これからも若手教

官や女性研究者の登用、研究分野の再編、特任教官の積極的採用を通して、その活性化をはかる所存であります。それに伴い脳科学研究も大きく変貌・展開しつつあるように思えます。とくに人工知能が、ヒトの知能や脳内活動を解読し始めたことは特筆すべきかもしれません。中田瑞穂先生らの「新潟大学脳研究室」が開設されてから、はや、60年以上が経過した令和の時代、やっとヒトの脳機能の本質が解明されつつあります。その意味でも、脳研究所の果たす役割、ミッションは今後、ますます増大することと思われれます。

とは言っても、日本の少子高齢化に伴ってアルツハイマー病やパーキンソン病などの神経難病は未だ克服されず、深刻な社会問題を引き起こすようになっていきます。その意味で、「脳疾患の克服」をスローガンとするこの脳研究所に「待った」はありません。もう一度、脳研究所の設立理念に立ち帰り、ヒト脳とその病気に向き合い、苦しんでいる患者さんやそのご家族に治療法を一刻も早く提供する責任があります。今後、その理念に向け脳研究所は自らを切磋琢磨し、大学の先頭に立って更なる機能強化を図らねばなりません。そのために知材の継承に加えて、さらなる国際化、世代交代、研究力強化に向けた研究部門の改変・改組を行って参ります。国立大学では引き続き厳しい財政環境が想定されますが、脳研究所は競争的外部資金の獲得などに最大限の自助努力を行いつつ、これらミッションの達成に向け自己改革を実践して参りますので、変わらぬご支援とご協力をここにお願ひ申し上げる次第です。

Message from the Director